

- 1 極月の旅荷に小さき献花など――
- 2 ぐんぐんと風邪にかたむくからだかな――
- 3 面接の窓に早梅探しをり――
- 4 てふてふにうすき砂丘の空気かな――
- 5 料峭の逢へばよそよそしき人よ――
- 6 ごみとなるまでしばらくは落椿――
- 7 春の野にただ突つ立つてをりにけり――
- 8 横綱のやうな態度や入学子――
- 9 平日の輝いてゐるつつじかな――
- 10 吉野家に頬杖をつき桜桃忌――
- 11 万緑に死して棋譜のみ遺しけり――
- 12 触れ合へば少しはづんで海月かな――
- 13 梶子や風強きまま夜となる――
- 14 堂々と汚れてゐたる網戸かな――
- 15 夜遊びに飽きしと露を煮てをりぬ――
- 16 だんだんと暮色の味となるビール――
- 17 冷蔵庫この世ならざる白さにて――
- 18 ボクサーを汗の果実と思ふなり――
- 19 供花として紫陽花の青褪せゆくよ――
- 20 緑陰を欲しがつてゐるダビデ像――
- 21 夕立の匂ふ包帯ほどきけり――
- 22 片恋の話ばかりよ更衣――
- 23 くちびるに神輿の揺れや祭笛――
- 24 秋扇と呼ぶるはうが似合ふなり――
- 25 角張つてゐるよ甲府（かふふ）の残暑とは――

- 26 炭坑節ならばと踊りはじめけり
- 27 立ち食ひの何でも旨き瀬祭忌
- 28 秋雨の匂ひの取れぬカーディガン
- 29 くやしきの極みの栗を剥いてをり
- 30 爽やかに森を濡らして雨脚は
- 31 洞窟の画像眺めて夜業かな
- 32 人去つて夜露の丘となりにけり
- 33 空高きことにも触れて弔辞かな
- 34 立冬や会議室より運河見え
- 35 繁盛繁盛繁盛叫ぶ熊手売
- 36 いまひとつ乾きの足りぬ落葉かな
- 37 凧のこれは水辺のなまぐささ
- 38 雷蔵(らいざう)の眼鏡姿や冬ぬくし
- 39 船小屋で海を見てゐる霰かな
- 40 肌色の夢より覚めて冬籠
- 41 問ひかける言葉ばかりの賀状書く
- 42 人ごみに流されながら初笑
- 43 初旅の部屋の大きなテレビかな
- 44 待春の仮名で人と逢つてゐる
- 45 臘梅を見上げて使ふ敬語かな
- 46 何味か分からぬ飴や下萌ゆる
- 47 東風吹くや汝が三十の初恋に
- 48 水温むラッコにとほき余生かな
- 49 円陣のひとり直立糺れり
- 50 さくらさくら山羊の尻尾の短くて

- 51 白靴のはづかしきほどおろしたて
- 52 冷奴頼むさつさと口説かねば
- 53 ぽっかりと海の闇ある祭かな
- 54 やまももの種もあらはに踏まれたる
- 55 先生の白樺色の夏帽子
- 56 三十三回転にて黴の匂ひけり
- 57 片陰を引き剥がすごと出できたり
- 58 だんじりのてつぺんにゐて勃つてゐる
- 59 冷房や少年王の副葬品
- 60 先輩と大きく呼びびてアロハシャツ
- 61 枝豆のぬるりと殻を出でにけり
- 62 雑巾で拭きたる今日の神輿かな
- 63 蜻蛉の翅は映らず池の面
- 64 台風が来るぞ来るぞとマトリョーシカ
- 65 たたまれて秋日傘とはたよりなく
- 66 冬瓜にいつか行くべき旅のこと
- 67 朝露のうつうつと人うらやんで
- 68 炊飯器買って良夜を帰りけり
- 69 林檎食ひながら林檎に飽きてゐる
- 70 金風や首にうるさき社員証
- 71 栗虫のしかばねとして丸まりて
- 72 馬肥えて三軒茶屋(さんげんぢやや)の交差点
- 73 銀漢の夜越山(よごしやま)とはよき名前
- 74 二の酉のすぐ見回せる社かな
- 75 湯たんぽにけふの怒りを注ぎけり

- 76 冬暁の小高き山として夫
- 77 三島忌のおみなごのみな脚長く
- 78 初雪の雨のはやさで降りつづく
- 79 拭くものがなくてふたりの日向ぼこ
- 80 初詣迎車するりと来たりけり
- 81 除雪車の過りて昏き車内かな
- 82 大寒のぬるりとまはる洗濯機
- 83 建国の日の嵩高き初校ゲラ
- 84 またの名はおにぎり山で春時雨
- 85 花時やあたたかさうなよだれかけ
- 86 いぬふぐりけむりは空を濁らせて
- 87 野球部の大きな尻も卒業す
- 88 つばくろや山の名前をよく覚え
- 89 春愁の極みのかほが鱒に似て
- 90 ちらちらと土筆環状八号線
- 91 黄金週間屋上に鳥居ひとつ――
- 92 カーテンのざらりと重く修司の忌
- 93 はつなつの出発ロビーとは眠し
- 94 人老いてラムネの瓶を開けてもらふ
- 95 花は葉にまたねと上手く笑はねば
- 96 避暑に来てそれは大きなテディベア
- 97 短夜に辣油一滴落としけり
- 98 手花火は頬を素直に照らしをり
- 99 氷水怒りはじめのゆるゆると
- 100 頬杖をついてゐるだけ夏手套